

# ロレンスの「個」を超えた世界

## Lawrence's Quest for a "Third Being"

中山本文

*Women in Love* 以降、明確に作者の関心が変わっている。それは物語に限らず、詩や評論にも共通している。そこには、「個」が断片化してしまっているという作者の思いが反映している。物語のある主人公は“impersonal”な「個」を追究している。また、ある中心人物は自ら“the incomprehensible”の“a manifestation”であるという事実を受け入れ、それを生きることによって人間存在の意味を見出している。両者とも「個」の個別性・独自性を認めつつも、そのまなざしは「個」の超越性に向けられている。彼らが口にする“demon”や“the Morning Star”は彼らが求める境地の特質を表象している。彼らには、人は「自分自身」と、「自分でない、あるもの」により成り立っているという信念がある。その「他者性」を容認して生きることによって、“the greater life”への糸口を見ていた。“A Propos of *Lady Chatterley's Lover*”や *The Plumed Serpent* で繰り返し強調される“betweenness”や“togetherness”は「個」を超えた世界のメタファーである。作者はそこに人間存在の本質を見ていた。この“betweenness”・“togetherness”は一人称でもない、二人称でもない「第三の存在」を暗示している。これを取り戻すことが出来るかどうかがロレンスの一番の関心事であった。

本稿では、「個」の完全性への疑問が、まず *Women in Love* において提示され、更に *The Plumed Serpent* の Kate において、自らの存在の個別性への疑問という形で一層明瞭に意識されていることを論証し、そして彼女の認識の変化を跡付けることによって作者が晩年辿り着いた境地を明らかにする。

キーワード：self, individual, impersonal, manifestation, a third thing

### 目次

- I 初めに
- II 「個」への疑問
- III 「閉じた個」
- IV 顕現としての「個」
- V おわりに

## I はじめに

Water is H<sub>2</sub>O, hydrogen two parts, oxygen one,  
but there is also a third thing, that makes it water  
and nobody knows what that is.

The atom locks up two energies  
But it is a third thing present which makes it an atom. (515)

これはロレンスの晩年に書かれた詩集 *Pansies* に収められている “The Third Thing” という詩である。ロレンスが「個」を超えた世界に関心を示し始めたのは、*Sisters* (後に二つの独立した小説 *The Rainbow* と *Women in Love* になる) を執筆していた頃と考えてまず間違いはない。その後、彼のその関心が明確な形をとるようになったのが *Women in Love* (以下、*Women*) である。この物語の主人公 Birkin-Lawrence は執拗に “personal” や “human” を超えることの意義を語り続ける。この物語で示されている「関係」へのこだわりが作者のこの方面への関心を裏付けている。*Women* は E. Delavenay の指摘するように、E. Carpenter の *The Intermediate Sex* の強い影響を受けて書かれたものであると言ってよい。しかし、ロレンスにおける「個」の超克の追究は単に個人のレベルにとどまらずに、人間存在の根源の問題へと発展している。ここに展開された世界は紛れもなくロレンス独自のものである。この関心は更に、*Aaron's Rod*、*Kangaroo*、*The Plumed Serpent*、*Lady Chatterley's Lover* と変遷の後を辿り、そして *The Man Who Died* (以下、*The Man*) の名前すら持たない「死んだ男」の甦りで頂点に達している。“impersonal” や “inhuman” と表現せざるを得なかったものが西洋的知を代表する、その後の物語の主人公たちの変容の過程を通して、次第に具体性を帯びてくる。これは紛れもなく思考の深化であり、ロレンスの作家としての成長の軌跡である。

本論では “impersonal” ・ “inhuman” がどのように深化して、*The Plumed Serpent* (以下、*Serpent*) や *The Man* の中心的課題である “the greater life” を獲得することになるのか、その発展の過程を明らかにする。

## II 「個」への疑問

ロレンスは個人的存在をそれ自身において充足したものと見なしていない。「個」の完全性についての疑問である。この疑問は、まず *Women in Love* の “Class-room” という章の Hermione と Birkin との間で展開される教育をめぐる議論に提示されている。彼女の論点は、現代の教育

は知識を植え付けることに汲々として、子どもが本来持つ“spontaneity”を奪っているという点にある。すっかり知的意識や自意識に縛られて、ひと時も自分を忘れることが出来なくなっている。こんな状態で生きるくらいなら、動物になった方がまだという彼女の“animalism”はここから生まれてくる。

—“never carried away, out of themselves, always conscious, always self-conscious, always aware of themselves.—Isn’t *anything* better than this? Better be animals, mere animals with no mind at all, than this, thins *nothingness*— (41)

しかし、Birkin は彼女の動物主義の嘘を見抜いている。彼女の動物主義は単に頭の中の出来事に過ぎないのだと。Birkin は Hermione の知的動物主義に対する批判として、いつも慎重で意識の糸を張り巡らしている彼女の“real body”の欠如を指摘し、いら立ちを隠さない。

You want to have things in your power. And why? Because you haven’t got any real body, any dark sensual body of life. You have no sensuality. You have only your will and your conceit of consciousness, your lust for power, to *know*. (42)

Birkin の批判の要点は“sensuality”の欠如にある。彼によると、“sensuality”の獲得は“a fulfillment”であり、“the great dark knowledge you can’t have in your head”である。それは我々の“a death to oneself”であるが、同時に“the coming into being of another”(43)である。Birkin の非難の矛先は Hermione 自身を超えて、彼女が代表している、頭でしか知識を得ることが出来なくなった人類一般に向けられている。彼の考えを要約するとこうなる。“sensuality”喪失の原因は「血」で知識を得ることを忘れてしまった我々の生き方にある。人間は一人の個人としての特性を持っているが、同時に“demon”でもある。頭脳で得る知識もあれば、“blood”で得る知識もある。そういう知識を持つことによって、“sensual”な肉体を取り戻すことが出来る。そして、その“sensual”な肉体は“personal”な「個」を超え、別の存在とひとつになる。“the coming into being of another”(43)の意味はそこに、「個」を超えることにある。ロレンスは“A Propos of *Lady Chatterley’s Lover*”で、ものを知る方法の一つとして“religious”で“poetic”な方法を挙げている。“blood”の別の表現であるが、同じく「個」を超えた世界を暗示している。

Birkin が言う、“sensuality”を獲得すること、すなわち「血の意識」をもつことは単に個人的な“self”を超えるだけでなく、古くて新しい存在の様式を獲得することでもある。それは、また“the coming into being of another”が暗示するように、「柔軟な個」の達成でもある。ロレンスは、Ursula の描き方にも細心の注意を払っている。彼女は家を“the sordid, too-familiar place(11)”と見て、どこかで過去と決別したがっている。彼女は結婚を人生における経験の終わ

りだと悲観的な考えをもち、両親たちのような結婚にいかなる希望も抱いていない。しかしながら、“Everything withers in the buds.” (9) と発言して憚らない Gudrun のように、あらゆることに “nihilistic” でもない。何事にも否定的な Gudrun の描写とは対照的に、Ursula の描き方は肯定的である。—something was coming to pass. (9) この描かれ方からして、彼女に新しい女、新しい存在様式が意図されているのは間違いない。それは勿論 A.Huxley が *A Brave New World* で描いて見せた、存在様式の全てにおいて非人間的に合理化された、新しいタイプの存在でもなければ、H.G. Wells が *The Time Machine* で提示した、ただ生の機能だけを生きている、頭だけが以上に大きく、足の細い未来人とも異なる。両者が描く世界ではそれぞれの生きた関係が失われ「関係している」ことの意味さえ語られない。彼らがディストピア小説というかたちで、逆に人間のあるべき姿に対する作者の考えを反映しているのは明らかである。そういう彼らとは違って、ロレンスは現実を舞台として人間関係の現状を見据える。その点で、Huxley と Wells は、「つながっている」ことの重要性、「つながっている」ことに個々の存在が生きていることの意味があることを強調するロレンスと大いに異なっている。一つの個が真に存在するためには必ず二者—“self” と “another”—が要る。ロレンスは小説やエッセイで「関係性のうちにある個」の問題を強調しているが、この「個の二重性」に対する信念から来ている。ロレンスは *Women* において様々な関係を描いている。まるで新たな生の存在様式の可能性を探るかのよう。しかしながら、Gerald も Hermione も、それぞれ自分の “individuality” を Gudrun や Birkin に押し付けるだけで、相手との関係に身を委ねようとはしない。Ursula は Birkin が開示する「個」を超える世界に心のどこかで興味を引かれながらも反発と戸惑いを禁じ得ない。確かに、終章近くで Birkin の考えに理解を示すようになってはいるものの、彼の、おそらく究極の目標である結婚を、“a way to accept the whole world”、すなわち「広がり」へ至る道として受け止めるところまでは達していない。依然として、Ursula は「個」としての自身のうちにのみ存在している。故に、二人の間に “gleam” (Phoenix, p.530-1) が生まれることは決してない。この “gleam” は二者の間しか生まれない。

「独立した個」についての疑問は *Serpent* で更に明確な形を取っている。そのことは、古代神復活運動に取り組む二人の男が Kate に接する時の態度に十分に示されている。Kate には、Cipriano は単なる一人の男ではなく、“a living male power” (310) の化身であるように感じられる。自分を支配するかのように思えるが、決して個人的な支配ではない。彼の個人的な意志の支配ではない。Kate のこの感じ方は、西洋的な魂が枯渇したと自認している彼女の平衡感覚から来る。Kate には “religious” で “poetic” な感性が備わっている。“Submission absolute, like the earth under the sky. Beneath an overarching absolute.” (311) 大空は、確かに大地を覆っているが、決して支配してはいない。意志による支配ではない。ただ大地の上にある。そして、大地は大空の下にある。彼女は無意識のうちに、相手を大空に見たて、自分を大地と見なしている。ある意味で、それは受動であるが、積極的受動である。彼女はその神秘を感得し、肯定的に受け

入れている。それは一つの、自我の放棄であると同時に、自我からの解放である。Birkin 流に云えば、“sensuality”の実現、すなわち、“death to one self”であると同時に、“the coming into being of another”であることの実現である。

何処か自分を離れたように思える Ramón や Cipriano と接するうちに、Kate 自身も今まで知らなかった自分に目を開かれていく。こうして、自己主張してやまない自我の桎梏から解放された自由の喜びを Kate は知る。

She could conceive now her marriage with Cipriano: the supreme passivity, like the earth below the twilight, consummate in living lifelessness, the sheer solid mystery of passivity. Ah, what an abandon, what an abandon, what an abandon!— of so many things she wanted to abandon. (311)

正にこの自我放棄の神秘こそ、彼女にメキシコを去ることをためらわせるものに他ならない。存在の神秘性の受容。Kate は「自分である」と同時に「自分でない」自己のあり様を受け入れたのである。Kate の“of so many things she wanted to abandon”という神経質な力みのない、我執を脱した告白はそこから生まれてくる。そして、その境地を経験した Kate は、Ramón の目には「個」の限界性から抜け出そうとしているかのように映る。

She had the face of one waking from the dead, curiously dipped in death, with a tenderness far more new and vulnerable than a child's. (312)

Kate の変容を映し出す顔の表情から、*The Man* の死から甦った男の表情が浮かんでくる。日常の自我の殻から抜け出そうとしている Kate の様子を察した Ramón はこの機を逃さない。そして Kate に説得するように言う。

There *must* be manifestations. We *must* change back to the vision of the living cosmos: we *must*. The oldest Pan is in us, and he will not be denied. In cold blood and in hot blood both, we must make the change. That is how man is made. I accept the *must* from the oldest Pan in my soul, and from the newest *me*.... I am Quetzalcoatl himself, if you like. A manifestation, as well as a man. I accept myself entire, and proceed to make destiny. (316)

“A manifestation, as well as a man”を受け入れて生きているという Ramón の発言は、自己はすっかり自分なるものでできていると疑わなかった Kate の魂を激しく揺さぶる。“primitive gladness,

which was so impersonal and beyond her” (320) は Kate が初めて味わうものであった。彼女は Cipriano の目が彼女の中に見ていたものが、女という肉体を持った女そのものでなく、一つの顕現に他ならないのだと次第に気づくようになる。しかし、Kate はそこに女の存在の神秘を感じながらも、独立した一人の女という自負を中々捨て去ることができない。自己の不完全性を認めることをためらう Kate に彼はこう言う。

“Soul! No, you have no soul. You have at best only half a soul. It takes a man and a woman together to make a soul. The soul is the Morning Star, emerging from the two. One alone cannot have a soul.” (389)

Kate はメキシコに来るまでは各個人は一個の完成した自己、完全なる霊、完璧な自我を有していると信じていた。しかし、古代神ケツアルコアトルの復活運動を推し進める Ramón を初めとする現地の人たちに接するうちに、最初、肌の黒い、不気味な存在でしかなかったインディアンたちに “Something rich and alive” (105) を認めるようになる。彼らのうちにある、男性的な、文明化された白人に見られない「生の輝き」のようなものに心を奪われる。それは精神の美しさではなく、暗く、逞しい不断の血の美しさである。Kate は魅惑と反発を繰り返しながらも、ある一つの認識に達する。

The individual, like the perfect being, does not and cannot exit, in the vivid world. We are all fragments. And at the best, halves. The only whole thing is the Morning Star. Which can only rise between two: or between many. (390)

これは Ramón の発言を Kate が回想しているところであるが、自分は “a complete self” (102) を持っていると感じて疑わなかった彼女が自分の個性に疑問を持ち始めていることを示している。Kate はアイルランドの誇り高い旧家の生まれで、彼女の血は普通一般の血とは異なってずっと優秀な別格の流れを持っていると教育され、そのことに何の疑いも抱いていなかった。しかし、彼女には Ursula に似たところがあって、自我に雁字搦めになっていない。

She was naturally quite free-handed and she left people their liberty. ... She had a strong life-flow of her own, and a certain assertive *joie de vivre*. (251)

“counting the individual existence a trifle” (416) と見なして、幾世期も生きぬいてきたこのインディアンたちの生き方に、時には気が狂いそうになりながらも、“Blood is one blood. We are all of one blood-stream.” (416) という彼らの原始的な主張に心が開かれていく。Kate のこの変化は

*Women* の最終章における Ursula の 変化を思い出させる。Birkin が二人の間に築こうとする非個人的な関係に対して、個人的な愛への執着を捨て去ることが出来なかった Ursula が妹にこう言う。“Love is too human and little.” (438) 自分の領域から一歩も出ることを拒んだ彼女の発言とは思えないほどの変化である。

I believe in something inhuman, of which love is only a little part. I believe what we must fulfill comes out of the Unknown to us, and it is something infinitely more than love. It isn't so merely *human*. (438)

Kate は、“something inhuman” の存在を認め、“what we must fulfill comes out of the Unknown to us” という境地への開眼を見せた Ursula を受け継ぎ、そして彼女がたどり着くことが出来なかった血の認識にまで達している。二人の類似性、関連性は疑いの余地はない。ロレンスは *Serpent* を書き始めたころ、メキシコの歴史や神話の研究を始めている。*Women* で Birkin が繰り返し主張した “impersonal” な存在に基づく “inhuman” な関係の成就の手掛かりを古代神—「二つの道」の間の神—の象徴に読み取っていたのである。

「自分を超える」ことは関係を生きること。Gerald も Hermione も “relatedness,” “togetherness” の価値に信を置くことが出来なかった。Gerald が Gudrun との関係の破綻の果てに自殺してしまうのも、また Hermione が Birkin との間に「生きた関係」を構築することが出来ずに小説の半ばから退場してしまうのも、理由はその点にある。彼らは他者との関係に価値を見出すことが出来ず、断片的な「個」を生きることしかできなかったのだ。

### III 「閉じた個」

Ursula や Kate とは対照的に、自己の “impersonal” な側面に何の疑いも抱いていない人物が *Women* には描かれている。Hermione と Gerald である。彼女は “personal” な自分を生きることしかできない。Birkin を求めるのも自分の充足のため。“Classs-room” で明らかなように、自分に疑問を持つことはない。その意味で彼女は「閉じた個」を生きている。*Apocalypse* でロレンスは現代の民主主義の世の中で個人主義を奉じる人々はひと時も個人を離れて生きることが出来ないと断言する。

Democratic man lives by cohesion and resistance, the cohesive force of “love” and the resistant force of the individual “freedom.” To yield entirely to love would be to be absorbed, which is the death of the individual: for the individual must hold his

own, or he ceases to be “free” and individual. (195-6)

Birkin と Hermione の関係は、まるでこの発言を物語化したかのように、「結合」と「抵抗」の反復運動を具現化している。“Prologue”によると、Birkin は Hermione と数年間、同棲しているが、今や彼は彼女の独占的な愛情の桎梏から逃れようとしている。*Women* の物語が始まる頃には、すでに二人は別々に暮らしている。しかしながら、Hermione は彼がそばにいないと落ちついていられない。いつも心の空洞に苦しめられている。Birkin との愛情関係の中にしか自分の存在を確認できない。換言すると、彼を自分のところに無理矢理つなぎとめておくことによってしか生きることが出来ない。Hermione の愛は相手に自由を認めない強制的な意志である。Birkin が彼女から逃げ出すのも無理はない。

彼女の愛の強制は、相手のことを何でも知っていたい、また、何でも自分の思うとおりに相手に指図をしたいといった態度となって表れている。Breadalby という章での Birkin の抵抗に注目したい。Hermione の屋敷に招待された Birkin や Ursula たちは様々な議論をしたり、水泳をしたり、夜はダンスをしたりして過ごしているが、そのすべては Hermione の主導のもとに行われる。彼女は主人としてすべてを取り仕切らないと気が済まない。みんなに指示をして、みんなを従わせないと不安になる。自分の意志に皆が従っていることを確認すると、自信に溢れて、落ち着いていられる。そういう彼女の心の平安をかき乱すのが、一番自分を落ち着かせてくれることを求めている Birkin である。彼はそういう彼女に一つひとつ反抗する。みんなで水泳に行こうと彼女が提案すると、Birkin は言うことを聞かない。一人で絵をかいて過ごしている。知識をめぐる議論では真っ向から彼女の主張に異を唱える。こうして彼女の支配の意志に抵抗し続ける。Birkin は彼女の意志に従うことによって自分の自由を奪われたくないのだ。*Apocalypse* の一節がよみがえってくる。

The individual cannot love: let that be an axiom.... And the modern man or woman is *bound* to kill, at last, the lover in himself or herself. It is not that each man kills the thing he loves, but that each man, by insisting on his own individuality, kills the lover in himself, as the woman kills the lover in herself.

(p.196)

この評論は *Women* の約 10 年後に書かれている。Hermione の描写を通して示された、現代的な愛のあり様に対する否定的な作者の見解はより明確になっている。否、むしろ確信に変わっていると見てよい。「個性は愛する個人を殺さなければならない宿命にある」という *Apocalypse* の発言は強烈に“personal”な Hermione の問題の十分な解説になっている。彼女は一人の個性を持った相手として Birkin を受け止めることが出来ない。ただ自分が存在するために彼を求めているに過ぎない。必然的に、彼女は彼を真に愛することは出来ない。彼女にとって必要なのは、

自分の意志の充足。これを阻むものは、彼女にとって破壊者以外の何ものでもない。そしていよいよ彼女にとっての Birkin という存在の意味が明らかになるのが、夕食後に彼が弾くピアノに合わせてダンスをする場面である。Hermione がすっかり夢中になって踊っている時に、Birkin はわざと彼女の調子を狂わすような演奏をする。“Class-room”での Hermione の教育論に対する批判の仕方も、Breadalby での Hermione の知識に関する考え方に反論する時も、Birkin のやり込み方は徹底している。どこにも逃げ場を見いだせず、すっかり窮地に追い込まれた Hermione が自分で自由に呼吸をするために、何とか救われようとするのはやむを得ない。Birkin という、自分を閉じ込めておく“the wall”を打ち壊さなければ自分が死んでしまうと追い詰められた彼女が Birkin の頭を文鎮で殴りつけるのは十分理解できる。文字通り、彼は殺されそうになる。頭に傷を負いながらも、何とか難を逃れた Birkin は無意識のうちに森に逃げ込む。この時 Birkin は奇異な行動をとる。一見奇妙であるが、お互いの意識に絡みつかれ、神経質になってしまった二人の関係を思えばむしろ自然な行為なのかもしれない。走りながら、彼は無意識のうちに衣服を脱ぎ捨て、裸になって身を横たえ、夢中になって森の植物に全身を触れ合わせる。そうしているうちに、自分を取り戻す。

The leaves and the primroses and the trees, they were really lovely and cool and desirable, they really came into the blood and were added on to him. He was enriched now immeasurably, and so glad. (107)

Birkin は植物という、人間とは別の“manifestation”に触れ、その生命が自分の血の中に流れ込み、再び自分が満たされた実感している。Hermione は彼を自分を閉じ込めてしまう壁だと恐れたが、実は彼女自身こそ彼を自分の意志に従わせようとする、彼の自由意志の破壊者に他ならなかった。Hermione は自分の個性の主張によって、“the modern man or woman cannot conceive of himself, herself, save as an individual.” (196) という *Apocalypse* の主張を裏付けている。結局、彼女は自分を超えて人を愛することは出来なかった。他者との間に自己の“betweenness”を樹立することが出来なかったのだ。

#### IV 顕現としての「個」

*Women* と *Serpent* は同じ意図のもとに創作されている。ロレンスは *Serpent* で「有史以前」の血の意識を持って生きている人物たちを登場させているが、実は *Women* の Birkin も古い存在の様態のうちに、どこか“inhuman”な生を生きている。Kate が「洪水」以前の血の流れのうちに生きているように思える Ramón や Cipriano に魅惑と反発を覚えるように、Ursula も

Birkin に魅惑されつつも、同時に反発する。しかしながら、ある何か、今まで自分が体験しなかった境地を垣間見させてくれる神秘性を彼が備えていることには気づいている。第23章 Drive で Birkin という人物の創造の意図が明らかにされている。ドライブの途中で、Birkin と Ursula は Hermione のことで口論をするが、やがて感情の嵐が去り、意識の緊張から解放される。夕闇が迫り、窪地にある伽藍から讚美歌が聞こえてくる。宿屋に来て、中庭に立っていると現実の世界が遠のいていく。—“She stood in the old yard of the inn, smelling of straw and stables and petrol.” (312) 聖書のキリストの生誕の場面に誘われるような描写である。宿屋で食事を取ることで、二人がパーラーの火の側に腰を下ろしている。

New eyes were opened in her soul, she saw a strange creature from another world, in him. It was as if she were enchanted, and everything were metamorphosed. She recalled again the old magic of the Book of Genesis, where the Sons of the God saw the daughters of men, that they were fair. (312)

ここには、日常の自我から離れ、意識的な目を閉じた Ursula の様子が描かれている。彼女はすっかり彼の魔力の虜になっている。この時、彼女が彼のうちに認めた“a strange creature”は Birkin の異質性を物語っている。また、“Genesis”や“the Sons of the God”には Birkin が執拗に繰り返す人間存在の“inhuman”な性質が暗示されている。更に、この性質は Ursula が魔法にかかったかのように、彼に引き寄せられ、彼の前に跪き、彼の腰や腿の後ろを抱きしめる時に明らかになる。彼女は男の体に感受性豊かな指を這わせながら、その指先は敏感に彼の体の中に“mysterious life-flow” (313) を感じ取る。

It was a strange reality of his being, the very stuff of being, there in the straight downflow of the thighs. It was here she discovered him one of the Sons of Gods such as were in the beginning of the world, not a man, something other, something more. (313)

Ursula が“Class-room”で見た Birkin の“the powerful beauty of life itself” (44) がここに新たな表現を与えられている。“not a man, something other, something more”は同時にその特質を説明している。Birkin の生命力は彼という一人の男としての個的存在を超えた、大きな命に通じている。彼は言わば、「大いなる生」を生きている。

*Serpent* で Kate はここでの Ursula と極めてよく似た体験をしている。広場で太鼓のリズムに合わせて半裸の現地人たちと手を取り合って踊っている場面である。この時 Kate は大地のいのちとひとつになって、夢中になって地面を踏みしめて踊っている男たちに“inhuman”な生命

の流れを感じ取っている。Ursula がここで自分の両手の間に掴んでいるものは、Kate がインディアンたちとの手による触れ合いで確信した“mysterious life-flow”と同じものである。言うまでもなく、Ursula と Kate が体験した触れ合いは個人の意識を超えた次元で達成される、“the Unknown”との会合である。

— the most intolerable accession into being, the marvelous fullness of immediate gratification, overwhelming, outflooding from the Source of the deepest life-force, the darkest, deepest, strangest life-source of the human body (314)

Ursula が Birkin に認めたこの異質性は、Kate が Ramón に認めるその異質性と極めて近い。Kate には彼が世俗を超えたところで生きているように思える。“Something beyond” (100) を求めて、人々と“the quick of all things and existence” (100) で出会うことを願っている。彼によると、そこで出会う時、人々はいかなる衣服をつけてもいない。現に、彼女の周りにはインディアンたちは“the Source of the deepest life-force”から溢れ出てくる生を生きている。彼らは“innocent”な力に満ちている。Hermione が言う、自意識過剰で“never carried away”な人たちとは似ても似つかない。故に、Kate も自然に“innocent”な自分に立ち帰る。“the morning star”は“the quick of all things and existence”へ至る鍵である。あまりにも個人的になり過ぎた私たちは“the vision of the living cosmos”へ立ち返り、“must”を受け止めて生きて行かなければならないと Ramón は信じている。人間はみな個人的であると同時に“manifestations”でもあるのだと。この“a manifestation”を生きている Ramón は Kate には、“he was remote, remote from any woman” (316) ように見える。彼はそれほど個人を離れている。このような生を生きている Ramón はいつも“as if looking at her from far, far away.” (325) と Kate には感じられる。

現実離れした Ramón の性質は、“To Stay or not to Stay”という章においても見られる。地球の表面が人間の様々な意志の戦場と化し、あらゆる人が絶えず自分の意志を振り回している状況を憂う Ramón と Kate のやり取りの中で、彼は自分自身の人間性を、自分自身の男性を発見したと語り、そしてさらに続けてこのように言う。

And—then when you find your own manhood—your womanhood, ... “then you know it is not your own, to do as you like with. You don’t have it of your own will. It comes from—from the middle—from the God. Beyond me, at the middle, is the God. And the God gives me to it. I have nothing but my manhood. The God gives it me, and leaves me to do further. (74)

Ramón のこの発言は、*Women* の“Mino”という章で、個人的な次元にこだわり続ける Ursula

に対する Birkin の発言とよく似ている。“I deliver *myself* over to the unknown” (147) “One is committed” (152) に込められた Birkin の想いは Ramón の思いと同じである。

Birkin は物語の中の他のどの登場人物と比べても、一人の生活者としての現実感に乏しい。家族もいなければ、家もない。水車小屋に間借りをしている。視学官を職業にしているが、実際、仕事をしていると思われる場面は Class-room という章に一回あるだけ。物語における彼の役割は、Ursula や Gerald との対話に明らかなように、思想家であり、新たな生の探究者といったところ。作者は Birkin の Ursula との異性関係や Gerald との同性関係に執着を見せている。明らかに、作者は来るべき時代の人間像を模索している。しかし、結局、物語の終章で明らかなように、Ursula は十分に Birkin の考えを理解しているとは言い難い。一方、Gerald は自分という存在の空しさに耐えきれずに自らを雪山に葬ることになる。この物語は新しい人間像の創造を試みているが、彼の悲劇的な結末で明らかなように、作者は新たな生のヴィジョンを提示できていない。しかしながら、現代の生のあり様のどこに問題があるかは十分に示している。

*Aaron's Rod* の Lilly も *Kangaroo* の Sommers も、確かに、魂の指導者として新たな生のあり方を追及する人物である。しかしながら、Ursula が “the son of the God” と見紛う Birkin の特質を受け継いでいるのは、間違いなく、Ramón である。Kate は Ramón に「古いヨーロッパ人」を想像する。彼はメキシコという、「有史以前」の世界で古代神復活運動によって “the mental-spiritual world” を “the old mode of consciousness” (415) の上に根付かせようとしている。Ramón は自らを二者の間に現れる “the strange third thing” (389), “the Morning Star” だと言うように、「中間」の支配者である。自分を超え、世間を超えている。彼は時として、真っ暗になった部屋で一人無意識の世界に浸り、魂を暗い意識に包み込まれて現実の世界を離れ、“the incomprehensible” の世界に入っていく。“—With no Time and no World, in the deeps that are timeless and worldless.” (193) Ramón- Quetzalcoatl は言う。

“We will be masters among men, and lords among men. But lords of men, and masters of men we will not be. ...” “We are not lords of men: how can men make us lords? Nor are we masters of men, for men are not worth it.” “But I am the Morning and the Evening Star, and lord of the day and the night. By the power that is put in my left hand, and the power that I grasp in my right, I am lord of the two ways.” (178-9)

Kate に Ramón が「この世から隔たっている」ように思えるのも、彼が自分を超えているという点、「自己を超えた自分」に目覚めているからに他ならない。一人の人間であるばかりでなく、“a manifestation” なのだという認識に達している Ramón は、Kate には “a messenger from the beyond” (316) であるかのように思える。個人を超えた人間の大きさ、偉大さに触れた Kate は、

Cipriano の “To me Ramón is more than life” (306) という言葉に納得し、彼がすっかり心服してしまっている理由を理解する。このように個人を離れて、自ら “a manifestation” と化している時の Ramón と一緒にいると、Kate がついついの自我を忘れて、“Let me close my eyes to him and open only my soul.” (184) と思ってしまうのはごく自然なことである。相手が個人を離れているから、彼女も自分にこだわる必要がない。自分であると同時に、自分を超えた存在でもあるという様態を獲得している Ramón と Cipriano は、Kate には自分より豊かな生を生きているように思える。“—They have got more than I, they have a richness that I haven’t got.” (184) Ramón は個人を超えているがゆえに、時も世界も超えた領域に立ち入ることが出来る。更に、旧約聖書を思わせる世界が小説の舞台となっていることも、作者の意図の暗示になっている。“the Tree of Life is one Tree” (249) という Ramón によって開示された世界は、John Donne が垣間見た世界に通じるものがある。“Devotions upon Emergent Occasions” の一節である。

No man is an island entire of itself; every man  
Is a piece of the continent, a part of the main;  
If a clod be washed away by the sea, Europe  
Is the less, as well as if a promontory were, as  
Well as any manner of thy friends or of thine  
Own were; any man’s death diminishes me,  
Because I am involved in mankind.  
And therefore never send to know for whom  
The bell tolls; it tolls for thee.

“No man is an island entire of itself; every man Is a piece of the continent, a part of the main  
Kate” には Donne の人間の個的存在についての思念が印象深く凝縮されている。彼は 17 世紀、まだ人々が個人意識に目覚めるはるか以前に、人間存在の究極の姿を洞察していた。

## V おわりに

ロレンスが独立した個人という観念に対する疑問を明確に意識し始めたのは *Women* からだと  
言ってもよい。Birkin が繰り返し強調する “impersonal”、“sensual”、“blood” は自分で一杯になっ  
ている、あるいは凝り固まっている Hermione に対して使われている。彼女は、言わば、“visible  
woman” を代表している。Ursula も Kate も「確たる個」をもっていると信じている。しかし、  
二人とも自分の個を振り返る柔軟性をもっている。Hermione ほど凝り固まっていない。二人は

新たな個の見出しの可能性を秘めている。もちろん、それが簡単な道ではないことは二人の「ためらい」が十分に示している。この「ためらい」がないのが *The Man* のイシスの巫女である。名前を持たない「死んだ男」に呼応するかのように、彼女も名前を与えられていない。意識の衣、世俗の衣を脱ぐ Birkin や Ramón のように、二人は「個人的な私」を捨てている。物語の最後に男が旅立つとき、女が何も言わずその離別を受け入れている場面は二人が “the greater life” の意味を知っていることの証である。

ロレンスの「個」の “impersonality” への関心は “We’re too full of ourselves.” という思いに発している。しかし、彼はここに立ち尽くしてはいない。 “a third thing, that makes it (i.e. H<sub>2</sub>O) water” に「閉じた個」が「開かれた個」に変容する可能性を見ていた。

#### Works Cited

1. D.H. Lawrence, *Phoenix: The Posthumous Papers of D.H. Lawrence*, Ed. Edward D. McDonald (New York: The Viking Press, 1972)
2. D.H. Lawrence, *Lady Chatterley’s Lover*, Ed. Michael Squires (Cambridge: Cambridge University Press, 1993)
3. D.H. Lawrence, *Women in Love*, Ed. David Farmer, Lindeth Vasey and John Worthen (Cambridge: Cambridge University Press, 1987)
4. D.H. Lawrence, *The Plumed Serpent* ED. L.D. Clark (Cambridge: Cambridge University Press, 1987)
5. D.H. Lawrence, *The Complete Poems of D.H. Lawrence* collected and edited with an introduction and notes by Vivian de Sola Pinto and Warren Roberts (London: Heinemann, 1972)
6. D.H. Lawrence, *The Apocalypse* edit. with introduction and notes by Mara Kalnins (Harmondsworth: Penguin Books, 1980)
7. Peter Preston, *A D.H. Lawrence Chronology* (New York: St. Martin’s Press, 1994)
8. John Donne, “Meditation 17” contained in “Devotions upon Emergent Occasions” (1624)

#### Bibliography

1. Emile Delavenay, *D.H. Lawrence and Edward Carpenter A Study in Edwardian Transition* (London: Heinemann, 1971)
2. Wayne Templeton, *States of Estrangement The Novels of D.H. Lawrence 1912-1917* (The Whitston Publishing Company, 1989)

3. Colin Milton, *Lawrence and Nietzsche A Study in Influence* (Aberdeen Uni. Press, )
4. Emile Delavenay, *D.H. Lawrence: The Man and His Work The Formative Years: 1885-1919* (London: Heinemann, 1972)
5. James C. Cowan, *D.H. Lawrence and Trembling Balance* (Pennsylvania: The Pennsylvania State Uni. Press, 1991)
6. Eugene Goodheart, *The Utopian Vision of D.H. Lawrence* (Chicago: University of Chicago Press, 1964)
7. Peter New, *Fiction and Purpose in Utopia, Rasselas, The Millon the Floss and Women in Love* (London: Macmillan, 1985)
8. Peter Fjagesund, *The Apocalyptic World of D.H. Lawrence* (Universitetsforlaget AS: Norwegian University Press, 1991)
9. Mathew Leone, *Shapes of Openness* (Newcastle upon Tyne, Cambridge Scholars Pub., 2010)

